

細い赤い糸

目次

細い赤い糸

5

受賞の言葉
人の世
263

受賞の決った日

257

「細い赤い糸」校訂について

「細い赤い糸」は、光風社の書下ろし初刊本（昭和三十六年三月・刊）を底本とし、適宜、講談社文庫（昭和五十二年十二月・刊）と校合して誤植の訂正、語句統一をおこなった。

漢字表記や単語表記については初刊本の表記を遵守しつつ、講談社文庫版が望ましいと思われるものは同書の表記を採用している。

（例） 噂さ ↓ 噂

追求 ↓ 追及

帖 ↓ 畳

ハンバーク ↓ ハンバーゲ

初刊本では〈水力公団〉と〈水道公団〉が混在して不統一だったが、本書では、著者に確認を得たうえで講談社文庫版と同じ〈水道公団〉の名称に統一した。

〈関山秘密探偵事務所〉と〈関山秘密探偵社〉の混在については、講談社文庫版でも統一されていなかったため、著者校正によって後者に統一した。

細い赤い糸

主要登場人物

- 戸塚一郎……………水道公団管理部検取課の職員
野村作次郎……………T鋼管営業課勤務
佐々木……………水道公団管理部検取課第一係長
樋口利男……………家具職人の見習い。与太者
細谷……………運送会社で働く青年
森井八郎……………Dセメント経理部長、取締役
大友道也……………Dセメント経理部勤務
国安敏子……………大友の同僚
鹿島篤子……………洋裁店のオーナー
関山信太郎……………関山秘密探偵社の探偵
鳴瀬……………川島病院の副院長。外科医
佐倉……………川島病院の外科医長
川島……………川島病院の院長
久野……………警視庁捜査一課の古参刑事
田島……………久野とコンビを組むS警察署の刑事

第一章 谷間の人達

1

日が少し長くなっていた。

駅の巨大なコンクリートの庇ひさしの下へ向って、勤め帰りの人の群れが、よく訓練された動物のようになり、四方の歩道から、信号のある所を横ぎって、集り流れこんでいた。

その流れは、ある独特のざわめきと、漠然とではあるが何か共通の目的を持っているような気き魄はくを帯びていた。集った流れは駅の方から庇の下へ入りこんでいた。その角に、カウンターの上に赤い電話器を幾つも並べた四角な小屋が建っていた。そして電話器と同じ位の数の人が、そのまわりに集っていた。

「……ねえ、ほんとに早く来てよ。いやんなっちゃうなあ、いつもあなたは遅くって。……うん、うん。……そんなことないわ。……じゃ先に行ってるわよ。……いやだなあ——また、そんなこと言ってる。……うん、……なに言ってるんの、わたしは大丈夫。あなたこそ。……じゃ、入口の所

で待つてるわよ。いやよ、あんまり待たしちゃう……」

黄色いセーターを着た、白いふくらんだ頬をした女の子が、受話器を置いた。その受話器をすぐ又別の手が掴んだ。女の子は、人の間をくぐり抜けるようにして、カウンターの離れた。

戸塚は、手に握って温くなっている十円玉を穴に落して、ダイヤルを回した。ブザーが鳴り始めると、彼は息を吐き出して、前を流れている人の群れに目を向けた。

彼はまだ三十を越していなかったが、その目は、年よりずっとふけて、冷たい油断のない色をしていた。薄い唇の色は黒く、艶のとほしい頬は、骨に貼りつくように凹んでいた。その全体として静かな顔は、彼が今まで一度も自由な場所で、自分の意志で仕事をやったことがなく、ただ大きい組織の中にひそんで、人のやった仕事を調べることで日を過して来たことを物語っていた。ブザーが止り向うの返事が出ると、彼は、

「ああ戸塚だがね」

と言つて、暫く相手の反応を確かめるように耳を澄した。

「野村さん、いる？」

相手が代った。戸塚は低い押しつけるような声で話し出した。

「ああ、あのね。これからちよつと会いたいんだがね。——え？ いや、ちよつとね、折り入つて相談があるんだよ。こりや相当重大な問題になりそうなことなんだよ。……いや、緊急を要するんだ。……ほう？ ……何だい？ 弱つたなあそりや。家に急病人でもあるの？ ……ふうん……そんならね、野村さん、ちよつと時間を割いて貰いたいな。え？ こりや仕事の話だよ。遊

ほうつてんじゃないんだよ。そりゃね、あんたの方で、どうでもいいってんなら、まあ放つともいいんだけど、それじゃ、あんたの方が困ると思うんだよ。——だからさ、お互いに相談しようというんだよ。——電話じゃちよつと話せねえんだ。そんな簡単なことじゃないんだよ。おたくの商売に差しつかえることだと思うんだがね。今じゃ、おたくも大きくなつたけれどさ、これで、うちに対する毎月何千万の仕事が止つたらどうするんだい。もううちの方なんかどうでもいいつてんなら、それでもいいよ。……そうだろ？ ……ああ、それもそうだし、今度納めてもらう鑄鉄管ちゅうてつかんだつて、まだ検査は済んでないんだからね。納期はこの二十日だよ。丁度一週間しかないよ。どうするんだい？ ——うん、だからさ、それもあるし、ともかくこういう話はね、あんたでなきゃ話せねえんだ。いきなり、おたくの専務さんなんかに出て来られても、お互いに困るだろ？ え？ ……うん。じゃね、いいかい。あそこへ行つてるよ。うん、うん——」

戸塚は受話器を置くと、周囲には目をくれず、静かな憂鬱ゆううつそうな顔になつて、ダスターコートポケットに手をつこんで歩き出した。彼は、駅から外へ向つて、群集の流れの端を、それさからつて歩いた。

彼は、こちちに向いて歩いてくるおびたらしい人に対して、全く無関心のようであつた。群集の中では、彼の職権は何の役にも立たず、職権の役に立たない場所では、彼は興味を失うのであつた。

タクシーの乗場に来ると、案内人がドアを開けた。荷物を持った中年の女が、駆けこむように戸塚を押しつけてその中へ入つた。戸塚は静かに体を引いて、次の車へ乗つた。

銀座の裏通りの、あまり目立たない構えの料理屋の前で、戸塚は車を下りた。迎えに出た女中に、

「頼むよ」

とタクシーの方に顎をしゃくつて見せた。

店の中はまだ静かであった。彼は磨き立てられた廊下を女中のあとについて奥の方へ歩いた。

「野村君から電話があつたら？」

「はい、ございました」

女中は、小部屋の襖かすまを開けた。

「すぐ、お見えになるそうです」

戸塚は、太い床柱に背をもたせて足を投げ出すと、タバコに火をつけた。女中が、蒸しタオルと茶を持って入って来た。

「大分お暖くなりましたね」

「そうだな」

と戸塚は答えた。

床脇の小窓から、夕陽が部屋の端に落ちて、畳の表は冷えていた。

「すぐお持ちしましょうか」

「まあいいや。野村君が来てからにしてくれ」

戸塚は、蒸^むシタオルでゆつくり顔を拭^ふくと、それを籠の上へ投げた。

「相変らずお忙しいんですか」

「まあね。いろいろあるからね」

「もうおつつけいらつしやるでしょうから、暫くお待ち下さいませ」

女中は、タオルを持つて部屋を出て行った。

戸塚は、沈んだ静かな目を、反対側の茶色の土壁の上に向けて、タバコの煙を吐いていた。

彼が一本のタバコを喫^すい終らない内に、襖が開いた。

「お待たせしました」

野村は部屋の隅に古ぼけた鞆^{かばん}と、デパートでも買ったらしい大きい箱の包みを置くと、戸塚の前に坐った。そしてポケットからタバコのケースを出して卓の上にのせると、

「何かあるんですか」

野村は、さも驚いたように目を見張り、陽に焼けてあまり生氣のない面長^{おもなが}の顔を、戸塚の方に突き出した。垢じみたワイシャツのカラーに皺^{しわ}が寄って、紺色の古い細いネクタイが、ぶら下つていた。そして節^{むし}の太い指でタバコを抜き出すと、卓の上をとんとんと叩き出した。

「まあ、そりゃゆつくり話すよ」

「そうですね。何か重大な用事のようなお話でしたが」

「まあ、そっだよ」

戸塚は、卓の上に皿を並べている女中の方をちらと見た。女中が二人のコップにビールを注ぐと、野村はそれを目の前に上げて、

「——どうも」

と呟いて機械的に口へ持つて行つた。戸塚は黙つて頷いた。そして暫く二人は、何も言わずにゆつくり、飲みながら、箸を動かした。

「ちいちゃん、ちよつと悪いけど、あつちへ行つててくれないかな」

暫くして、戸塚が女中にそう言った。女中が去ると、戸塚はビールの半分程入つたコップを眺めながら、ぼつそりとした声で切り出した。

「M工業が挙げられたのを知ってるだろう？」

「ええ、新聞に出てましたね、二三日前。××省の係長と一緒に——」

野村もコップを置いて、両方の手を卓の下に下げた。

「今問題になっているのは××省の件なだけけれど、実はウチの方でもM工業と関係があるんだよ。あの業者は外交が派手で、それでのして来たようなもんなんだ。それで昨日うちの契約課の係長が警視庁へ呼ばれて事情を聞かれたらしいんだ」

「芝田さんですか」

「そうなんだ。べつに拘留されたわけでもないんだけど、警視庁じゃ内偵を続けているらしいんだな。芝田さんが調べられるとなると、おれんとこの係長も危いんだ」

「佐々木さんが？」

「そうなんだ。うちの係長もM工業とだいぶ深いつき合いをしているんだよ。俺はちゃんと知っているけどな」

「——そうですか」

野村は、内心の衝動を隠すような薄笑いを浮べて卓上の一点を見ていた。

「うちの係長が、調べられるとなると、これはM工業だけじゃ済まないよ。肝っ玉の小さいお年寄だからね、ちよつと威かされたら、みんな吐いちゃうと思うな。おたくだって、相当やつてるだろう？ あの人に——」

「大したことはないと思いますがね。わたしはあの方とはあまりつき合いがありませんから」

「おたくの営業課長がよく来てるよ」

「ええ、そりゃね——」

「××省の係長がばくられたんだって、せいぜい二万や三万の金のことだぜ」

「まあ、しかしわたしの所は万一のことがあっても皆さんにご迷惑のかかるようなことは致しませんよ」

「そこなんだ。そこを何とかうまくやって貰いたいんだよ。そうなりやあんたの会社としても浮沈の瀬戸際だと思っただよ」

「そうですね」

「よく相談して、一応手を打っておいて貰いたいんだ。変な証拠になるような書類は焼き捨てる

かなんかしてだね。あんたなんかメモみたいなものを持ってたら、そういうものも焼いて貰いたいな」

「そりゃもう大丈夫なようにしておきますよ」

「しかしなあ——」

戸塚は考えこむように、ビールの瓶を取って野村のコップへ注ぎ、自分の方にも足した。

「僕はね、佐々木さんの方から、相当いろんなことが出てくるんじゃないかと思うな。相手は警察だしね」

「大丈夫ですよ」

野村は呟くように言った。

「大丈夫って、野村さん、ほんとにそう言い切れるかね。あんただって警察の取り調べを受けた経験はないだろう？」

「そんなことを今からびくびくしててもしょうがありませんよ。——ひとつ景気よく飲みましようや」

「しかし万一のことがあると、大変なことになるぜ」

「分つてますよ。なにも恐れることはありませんよ。わたしの方は公明正大ですよ」

「あんたは、そうだろうよ。別に責任者じゃないんだからね。しかしあんたの上の課長さんや、専務はこれだぜ——」

戸塚は両手を前に組み合わせて見せた。

「野村さんよ。自分が大丈夫だからって安心して貰っちゃ困るよ。会社が潰れりゃあんただって困るだろ」

戸塚は縁の赤くなつた目を怒つたように尖らした。

「そりゃ勿論ですよ」

と野村は言った。

「僕は自分のことだけを心配してるんじゃないからね。みんなが困らないようにと考へてるんだよ」

「ええ、よく分つてます」

野村はそう言ったが、その声には何処となく面倒臭そうな、何かほかに氣を取られているような響きがあった。戸塚は、その野村の顔を不満そうに見ていたが、

「じゃ、ひとつ飲むか」

と言つた。

「それがいいです」

「よし、じゃ女共を呼ぼう。今日は一日くさくさしてたよ。ひとつ憂さ晴しに、徹底的に飲むかな、今夜は」

戸塚は、ごろつと横に体を倒して、帳場へ通じる電話器へ手を延した。野村は、それへ何か遠くのものを見るようなぼんやりした視線を送っていた。

戸塚が目を覚した時、部屋には彼一人であった。卓の上は綺麗に片付いていて、野村の姿はなかった。彼は酔の醒めた白けた顔をして、目だけが赤く濁っていた。

「——畜生——」

彼は掛けてあつた毛布をはねのけて立ち上ると、廊下へ出て帳場の方へ行つた。

「よう、野村君は帰つたのかい」

彼は帳場の入口の柱に寄りかかつた。太った背の小さいおかみが目を細くして笑つていた。

「目が覚めました？」

「覚めたかじゃないよ。野村はどうした？ けしからん奴だ、あいつは——」

「あのね、野村さんは、どうしても今夜はお宅にご用があるんだそうですよ。それで戸塚さんがあんまりよくおやすみになっているものですから、先に失礼さして頂くと云つて、お帰りになりましたよ」

おかみは、宥めるように語尾をひとつひとつ上げて喋つた。

「ちえつ、幾らも飲んじゃいねえよ。やつは俺に一服盛つてずらかりやがつたんだな」

「戸塚さんは、いつも飲むとおやすみになるんだから——」

「それだけ純情なんだ。野村みたいな悪党とはわけが違う。——純情にして、前途あるちよんが、

あだ。——おかみ、何時？」

「もう十時半ですよ」

「よし、——俺は帰る——」

戸塚は、おぼつかない足取りで柱の所を離れて玄関の方へ歩き出した。

「ちよつと、ちよつと——」

おかみは立つて、戸塚を追いかけ、懐ふところから白い封筒を出した。

「これ、野村さんが、あなたに渡して下さいって」

「——なに？」

封筒を取った戸塚の目に、ふと正気の現れたような光りが浮かんた。便箋が一枚出て来た。

「——なに？ ——本日は、止むを得ぬ用事があり、失礼ながら先に帰らして頂きます。あとは何分よろしくお願い申し上げます——か。ふん、何がよろしくだ——」

戸塚は封筒の中を覗のぞいた。五千円札が一枚縦に二つに折って入れてあった。彼はそれを封筒ごととポケットに押しこんだ。

彼はおかみの方を振りかえらなかつた。殻かづに閉じこもつたような、暗い拒否きよひの表情がその顔に現れていた。靴をはき、おかみの声を後に聞き流しながら、彼は表へ出た。

その道の所々には、表通りに面して立っているビルの背中が向いていた。それらは暗く寝静まつていた。そしてそのビルとビルの間に、ひっそりと小さな看板を出した、喫茶店やバーがあった。戸塚は少しふらつき気味の足を踏みしめ、まるで何ごとかにじっと耐たえているように体に力

を入れて歩いていった。

彼は目的を持って歩いていっているようでもあり、そうでないようでもあった。角を二つ曲って、橋に出た。橋を渡った所の建物の前に、赤い灯の入った看板が出ていた。その扉を肩で押すようにして彼は中へ入って行った。

薄暗く狭い店で、カウンターの前が後と同じ位に細かった。戸塚は二、三人の客の背中を、体を横にして抜けて奥の椅子に腰を下した。

「どうしたの？」

恵子が前に来て、手の甲に小さな顎を載せた。

「何がどうしたんだい」

「元気がなさそうよ」

「——ふん」

戸塚はカウンターに肘をついて、頸筋をたいぎそうに撫ぜた。

「又何か面白くないことがあったの？」

恵子は揶揄するように笑った。頬骨が少し高目で、切れ長の目はいつも疲れたように動かなかつた。

「面白くねえことばかりよ」

「そうらしいわね。いつも愚痴をこぼしてるのね」

「そうさ、愚痴をこぼすことがなかったら、誰もこんな店へこないよ。陰気で、狭くって、しけ

ててさ。愚痴をこぼすためにあるんじゃないか。——お前達もな」

「愚痴を聞くためにいるの？」

「そんなもんだよ。——おい」

戸塚は声を低くして体を乗り出した。

「なによ」

「晚めし食ったか」

「とつくよ。何言ってるの」

「それじゃ、明日の朝めしを奢^せってやろう」

恵子は黙って、戸塚の顔を見て笑っていた。

「気の利いた朝飯をサービスする所があるぜ」

「誰と行ったの？」

「誰とも行きゃしない。只、知ってるんだ」

恵子は黙って、ウイスキーのストレートを水を添えてカウンターの上に載せた。

「今夜は、誰かと一緒にいたい——」

戸塚はそう言った。

戸塚は看板になるまでそこにねばって居た。

そのあとで、恵子を誘^{さそ}うと、タクシーで渋谷の近くのホテルに入った。新しい日本間の部屋であつた。

床とこに入ると戸塚は、顔を恵子の方へ向けて、自分が陥おちっている立場について喋り出した。それは一種情熱的な喋り方であった。恵子は俯伏うつぶせになって、枕に顎を載せ、袋に入れて持って来たみかんの皮をむいて食べていた。みかんと、戸塚の話と、どちらに主に注意を向けているのかはつきりしなかった。

しかし一方戸塚の方も、恵子がどれほど熱心に耳を傾けてくれているかということについては、あまり当てにしていけないようであった。彼は天井てんじやうの隅の方に目を向けていた。

「——これで万一のことがあれば、俺の一生は終りだ。誰が救ってくれる——俺には何の取りえもない。役人をやめたらそれでおしまいさ——」

「だって、あなたはもういろんなことをやってるんだから、仕方がないわね」

恵子は、爪を長くした細い指で丁寧ていねいに、みかんの実を出していた。

「俺がやろうと思っただけでこうなつたわけじゃない。全てのことからみあつてこうなつたんだ。たとえ俺でなくても、誰かが俺の立場に立てば、やっぱり同じことをやる。そういう風になつて行くんだ。それは俺のためにそうなるんじゃない。上役や、業者や、みんなが生きて行くためにそうなつちまうんだ」

「佐々木さんが挙げられたら、あなたも絶対駄目？」

「駄目に決つてるよ。係長は俺のやつてることをちゃんと承知して、見て見ぬ振りをしてるんだ。狸たぬきだからね。業者が調べられればその方からも出てくるだろうし——」

「上の人はやっつけないの？」

「やつてるさ」

「佐々木さんは、上の人のことも知ってるでしょう」

「あの人は何もかも知ってるよ。上の連中は俺達よりもっとうまくやってるんだ。今年の正月課長の所へ遊びに行ったら、ゴルフのセットはあるし、テレビは勿論ステレオまであるんだ。それで学校へ行ってる子供が二人もいるんだ。課長の給料だけでそんなに出来るわけがないよ」

「じゃ、今直接危いのは佐々木さんだけ？」

「M工業と関係があるからね」

「あんたはないんでしょ？」

「M工業とはないよ」

「そうか——」

恵子は、何か納得なっとくしたようにみかんを食べた。

「うまく行かないものね」

「鹹くみになったら、何をやるうかな。恵子の所でバーテンに雇やとって貰おうかな」

「駄目よ、あんたみたいな人が来たら、一ぺんにお客が逃げちゃうわ。それよかさ——佐々木さんが自殺してくれればいいわね」

「——ふん」

「そうすれば一応あなたにつながっている糸はそこで切れるでしょう？」

「そうだろうな」

受賞の言葉 受賞の決った日

前の晩、東京一帯に珍らしく雪が降り、朝一面に白く積っていた。

「丁度二二六と同じだな」

会社で、年配の人がそう言っていた。

十時頃、私は同僚と一緒に車で横田の方にある工事現場へ向った。着いたのが丁度お午ごろ。

目的は、ジェットエンジンの試運転室の構造体が、その噴流から受ける影響を計測することである。測定装置をセットして、エンジンを始動したのが十六時九分。

エンジンは少し休んでは次第々に推力を上げ、やがて最大出力に達した。四角な塔のようなコンクリートの建物は、高熱にうなされたように震えていた。流れる記録用紙の上で、その震動を伝えるペンが、狂ったように踊っていた。

私達はそれを見ながら、

「凄いな、これじゃたまらないや」

と驚嘆していた。

人の世

推理小説は謎を楽しむ文学です。その謎は大抵一人の人間が——まあ犯人ですけど——作り出します。

でも、ある時思ったのです。この世には大勢の人が住んでいて、一人の人はいろんな人に別々のかかわりを持っており、その別の人もまた、いろんな人とかかわって生きております。

だとすれば、ある数人の互に無関係の人達のしたことが組み合わせあって、特定の人に悲劇をもたらす事があるかも知れないと考えてこの作品を書きました。そうなると、何故なにゆえそうなったのか当事者達には分かりません。つまりそこに謎が生れるわけです。

しかしよく考えて見ると、結果が悲劇になるかどうかは別にして、世の中の出来事というものはそんな風にして生れるのじゃないでしょうか。実は私の身にもそうした事があったのです。

私が最初に書いた「犯罪の場」は自分で書こうという意志で書いたものです。しかし次が書けなくて、一緒に当選した山田風太郎さん達の活躍を見て、自分には才能がないのだなと妙に納得して書くのをやめました。それが又書き出したには、自分の意志というよりいろんな方々の関

わりがあったのです。

私事わたくしごとではありますが、この作品の後書きとしては許されることと思ひ、ここに書いて見ます。話は、大学の建築材料学の教授であった浜田稔教授が、火山から出る軽石を使った軽量コンクリートの研究をされていた事から始まります。昭和二十年代の話です。日本には火山が沢山ありますが、使われていたのは主に、浅間山、榛名山、大島などの軽石で、浜田先生以外にも、何人かの研究者が居りました。そうした研究論文を元に、建築学会でも軽量コンクリートの標準仕様書を作って、それで建てた建物もありました。

浜田先生がお使いになったのは、浅間山の軽石でした。それでその調査の為に軽井沢へよく行かれたようです。軽井沢に星野という温泉旅館があります。今少し名前が変わっていますが、そこでは副業で軽石も扱っていたので、先生はよくそこへ泊られたようです。

今度はその旅館の話になります。旅館には婚期を迎えた女性が居りまして、その婿さん探しを、昵懇ひそひそになった先生にお願いしたので。当時はよくある話でした。

それからもうひとつ、星野旅館は東京の西池袋に四百五十坪ばかりの土地を持っておりました。終戦直後の焼け跡を買ったようです。何故軽井沢なによえの旅館がそんな所に土地を買ったのか。

これは全く私の想像ですが、軽井沢には政治家や事業家が別荘を持っております。星野の当時の主人は、なかなかの交際家でそういう人達と付き合いがあったようです。それで情報を得たり、あるいは「今買っとくといいぞ」と勧められたりしたのかも知れません。この話の上で大切なのは、これは全くの偶然なのですが、その土地が江戸川乱歩先生の屋敷に隣接していたことで

〔著者〕

飛鳥 高（あすか・たかし）

1921年、山口県生まれ。本名・鳥田専右（からすだ・せんすけ）。東京帝国大学工業学部卒業。工学博士。1946年、『寶石』の懸賞探偵小説に「犯罪の場」を投じて入選、翌年、同誌で作家デビュー。短編と並行して「死を運ぶトラック」(59)や「死にぞこない」(60)などの書下ろし長編を精力的に発表、62年に長編「細い赤い糸」で第15回日本探偵作家クラブ賞を受賞する。75年にコンクリート工学の研究で日本建築学会賞受賞後、本業多忙のため短編「とられた鏡」(76)を最後に断筆状態が続いたが、1990年、旧友が出版社を立ち上げた記念に長編「青いリボンの誘惑」を書き下ろし、久々に新作を発表した。2001年、日本推理作家協会名誉会員となる。

ほそ あか いと
細い赤い糸

2020年2月5日 初版第1刷印刷

2020年2月12日 初版第1刷発行

著者 飛鳥 高

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

校訂 浜田知明

組版 フレックスアート

印刷・製本 中央精版印刷

©2020 Takashi Asuka, Printed in Japan

ISBN978-4-8460-1885-6

落丁・乱丁本はお取り替えいたします